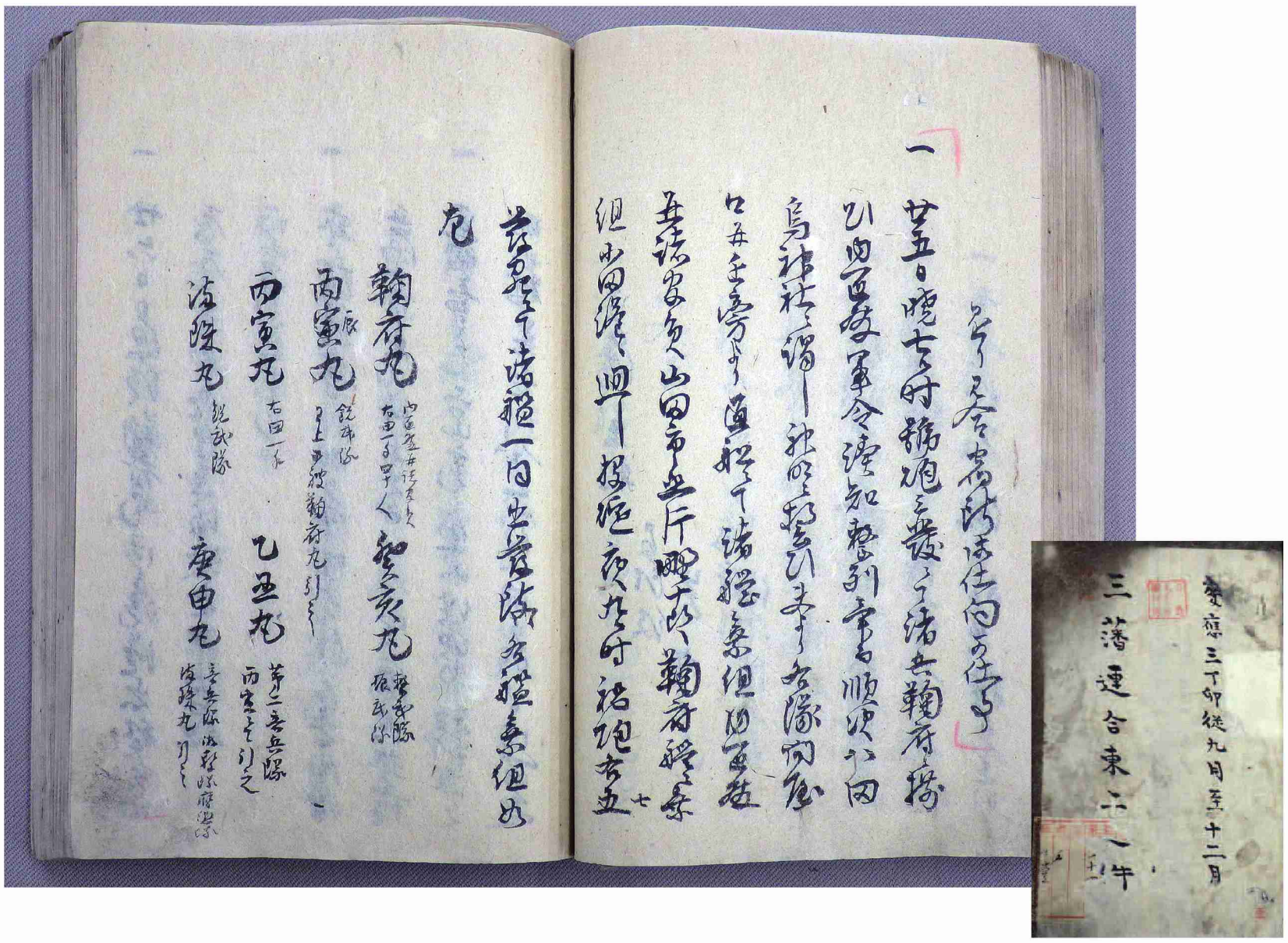
山口県史だより

第34号／平成29年11月

特集　あなたが綴（つづ）る山口県史



【「三藩連合東上一件」毛利家文庫67戊辰戦争一件2（山口県文書館蔵）】

この史料は、慶応３年（1867）11月25日に長州藩が討幕を目指し、東に向けて進軍していったことに関する記録です。左の頁には、奇兵隊などから召集された兵士らが分乗した７隻の軍艦の名前が見えます。

なお、史料名にある「三藩」とは、長州藩・薩摩藩、軍艦の先導役を務めた広島藩を指します。広島藩は、前年６月の芸州口の戦いでは、県境の小瀬川で一進一退の攻防を繰り広げて戦った相手でした。

特集

あなたが綴る山口県史

来年は明治改元（一八六八年）から一五〇年を迎え、多彩な記念イベントが各地で計画されています。しかしながら明治維新という壮大な社会変革は、一朝一夕に成し遂げられたものではありません。一五〇年前の今日、この日も明治維新は進行中でした。ある意味では、明治元年という一つの到達点に至るまでのプロセスの方が、むしろ激動の時代であったと言うこともできるでしょう。

今回の特集では、この「県史だより」の奥付にある発行日「平成二十九年十一月二十五日」の一五〇年前、つまり「慶応三年（一八六七）十一月二十五日」に何があったのかを調べる方法の一つをご紹介します。

■『維新史料綱要』を開く

『維新史料綱要』（**写真1**）という書籍があります。この書籍は、明治維新のプロセスを記録して後世に伝えるために、明治四十四年（一九一一）に天皇の命令で編さんが始まりました。担当したのは、文部省維新史料編纂事務局。史料収集に二〇年間を費やし、その要点を抜粋する作業に移行したのは、昭和六年（一九三一）でした。その後東京大学史料編纂所がこの事業を引き継ぎ、全部で一〇巻にまとめました。刊行は昭和十五年（一九四〇）。戦中・戦後の混乱期にも幸い原本は失われず、昭和五十八年（一九八三）に復刻版が刊行されました。そのため今では、誰でも気軽に手に取って見ることができる、明治維新史研究の基礎史料となっています。

写真1『維新史料綱要』
（東京大学史料編纂所、1940年）

明治維新に関連する記事をまとめた本ですから、山口県関係の記事は、ふんだんに見い出すことができます。「慶応三年十一月二十五日」（太陽暦採用前の日付です）を採録した頁（『維新史料綱要 巻七』三七七頁）には、次のような要約記事（「綱文」と言います）があります（ルビ筆者）。

（十一月二十五日）萩藩家老毛利内匠等、兵ヲ率キテ三田尻ヲ発ス。明日、御手洗港ニ至リ、広島藩士岸九郎兵衛・黒田益之丞等ト会シ、西宮（摂津国武庫郡）著船及上陸後ノ方略ヲ議定ス。同夜広島藩船先導ト為リテ出帆、東上ス。

毛利内匠とは、毛利一門右田毛利家の一二代目当主、毛利親信（藤内）をさし、長州東上軍総督の任にありました。内憂外患の中、徳川慶喜が「大政奉還上表」を朝廷に提出したのは、前月の十月十四日です。つまり慶応三年十一月二十五日は、江戸幕府にとどめを刺すために、軍艦に分乗した「兵ヲ率キテ」、毛利親信が「東上」（幕府軍が軍事拠点としている大坂城に向けて進軍）していった日だということがわかります。なお三田尻は瀬戸内海に面した萩往還の終点で、長州藩の船倉があったところです。

この本を活用すれば、一五〇年前の自分の誕生日にあった「小さな歴史」を調べることもできそうです。

■綱文の情報源を確認する

このような綱文は「二次史料」と呼ばれ、第三者の手によって編集・要約された副次的な情報として扱われることを免れません。だからこそ、気の遠くなるような手間と時間をかけて多数の史料を収集し、特定の情報源のみを信じて記載することなく、複眼的に一つの綱文に導くことに心が砕かれました。

そのため各綱文には、何を根拠として構成したのかという情報が付記されています。たとえば、上記の三田尻出帆の綱文の後には、情報源となった史料が「三藩連合東上一件」「長薩芸合従恢復軍略」など、八点も列挙されています

萩藩家老毛利内匠等、兵ヲ率キテ三田尻ヲ發ス。明日、御手洗港ニ至リ、廣島藩士岸九郎兵衛・黒田益之丞等ト會シ、西宮（摂津國武庫郡）著船及上陸後ノ方略ヲ議定ス。同夜廣島藩船先導ト爲リテ出帆、東上ス。
三藩連合東上一件　長薩芸合従恢復軍略　忠正公一代綱年史　藝藩志要　木戸孝允文書　防長回天史　井上伯傳　戊辰始末

佛國騎兵二人、入斗村（武藏國荏原郡）ニ於テ狩獵シ、村民（名主）ニ暴行ス。依テ、村民嘯集、騎兵一人及附添別手組一人ヲ捕縛ス。（尋デ、彈放ス。）　續通信全覽　長防勤王史

萩藩士伊藤俊輔（博文）兵庫ニ於テ英國公使館通譯官（サトウ）等ト會シ、討幕ノ避クベカラザルヲ告ゲ、大坂・兵庫ノ開市開港及公使上坂ノ期ヲ延ベンコトヲ求ム。　Satow; E: A Diplomat in Japan. Memoirs by Lord Redesdale.

写真2『維新史料綱要』の本文に記された典拠（頁の表裏を接続しています）

（**写真2**）。この史料情報は、必要に応じて読者が、より原史料に近い典拠に遡って綱文を点検することを可能としました。

■典拠にアクセスする

それでは実際に、綱文作成の根拠となった史料を読んでみましょう。たとえば、典拠の一つ「三藩連合東上一件」をインターネットで検索してみると、山口県文書館に所蔵されていることがわかります。けれども古文書のくずし字は、なかなかハードルが高いですね（**表紙**）。

一方、『維新史料綱要』を刊行した東京大学史料編纂所のホームページにアクセスすると、「大日本維新史料稿本」と呼ばれる史料画像が表示できます（**写真3**）。これは『維新史料綱要』の綱文を構成する際に、編纂事務局が収集した典拠を〈手書きで複写〉したものです。難しい字もありますが、おおむね楷書体で書かれており、何とか読み取れそうです（ルビ筆者）。

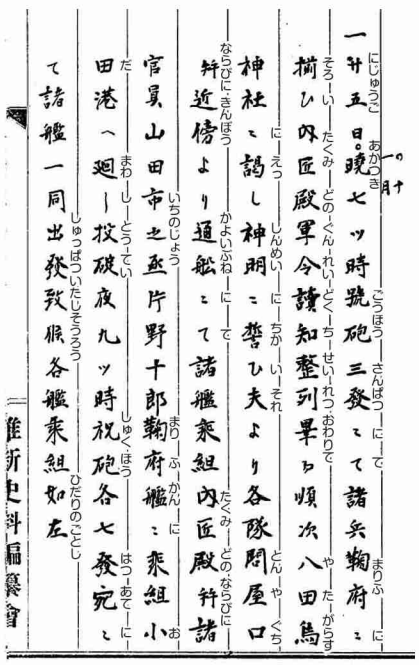

一廿五日。曉七ツ時號砲三發ニて諸兵鞠府ニ
摘ひ内匠殿軍令讀知整列畢ヲ順次八田烏
神社ニ謁し神明ニ誓ひ夫より各隊閉屋口
幷近傍より通船ニて諸艦乘組内匠殿幷諸
官員山田市之丞片野十郎鞠府艦ニ乘組小
田港ヘ廻ー投破夜九ツ時祝砲各七發宛ニ
て諸艦一同出發致候各艦乘組如左

写真3「大日本維新史料稿本」
（WEB上で表示された史料）

いかがですか。集合時刻は「〜お江戸日本橋七ツ立ち」と歌われた旅立ちの時刻だったこと。八田烏（八咫烏。初代天皇とされる神武天皇を東方へ導いたとされる伝説の鳥）神社（現・小烏神社）に参拝していることなど、古い時代の慣習を色濃く伝えていることが読み解けます。

続く部分には次のように記されています（**写真4**、囲み・傍線筆者）。

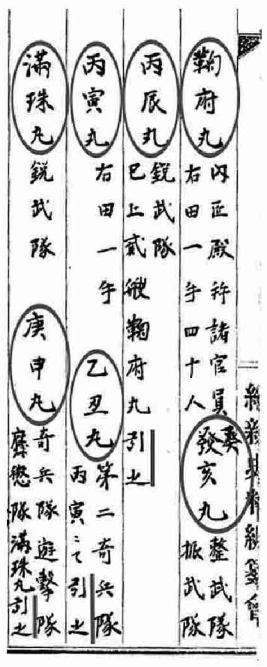

鞠府丸 内匠殿幷諸官員 右田一手四十人 發亥丸 整武隊 振武隊
丙辰丸 鋭武隊 巳上武艤鞠府丸引之
丙寅丸 右田一手 乙丑丸 第二奇兵隊 丙寅ニて引之
満珠丸 鋭武隊 庚申丸 奇兵隊遊撃隊 齊懋隊 満珠丸引之

写真4「大日本維新史料稿本」（上の画像の続き）

用意した軍艦は七隻で、「引之（これをひく）」と曳航（えいこう）役を引き受けた、少なくとも三隻が蒸気船であったことも推察され、ここからは近代的軍事力の側面が読み取れます。夜九ツ時（深夜零時頃）の出航時の祝砲は、欧米の慣習に倣ったものでしょうか。この音は、山口にいる藩主の寝室にも届いたことでしょう。

典拠となった史料には、このように新旧入り交じる幕末維新期の詳細な情報が記載され、読む者の感性を刺激します。これなら、要約されたわずか数行の綱文とは、また違った歴史像を結ぶことができそうです。

■自分なりに歴史を叙述する

しかしながら、ここに示された史料画像もまた、副次的な史料です。できれば、山口県文書館に行き、慶応三年に記された「三藩連合東上一件」の原史料を閲覧しながら、文字を一つずつ丹念に追ってみましょう。すると実物では、「祝砲各七発」という文字は、もと「五発」と記されていたものを訂正していることに気づくかもしれません（**写真5**）。なぜ訂正されたのか、なぜ最初に五発と記したのか……こう思考を巡らせていくと、特定の一日を掘り下げたあなただけにできる「小さな歴史を書きかえる発見」が待っているかもしれません。いいえ、大きな歴史だって例外ではないはずです。

この手法で歴史を検証していくと、私たちが手にしてきた教科書や歴史書が、こうした記録を丹念に収集・整理して編集されていることに思い至ることでしょう。けれどもどんなに優れた書物でも、それは、あなたではない「他の誰か」の目を通して編集されたものにほかなりません。その他者の歴史観を無批判に受け入れてゴシック体の文字を暗記するという受験勉強が、苦痛だった記憶。それが砂を噛むような印象だったのは、無理もないことです。

「唯一の正しい歴史叙述」というものは存在しません。主軸とする観点によって、読み解く立場によって、眺める地域によって、歴史の叙述は無数にあるはずです。さあ、今度はあなたが、原史料をもとにしながら「私だったらこう説明する」という山口県史を綴（つづ）る番です。（北林）

写真5「三藩連合東上一件」中の文字の訂正部分（拡大）

近世部会

夢のあと―萩城内の寺社―

萩市の指月山一帯は、萩藩毛利氏が城を構えた場所です。今は公園になっていますが、堀や石垣が往時を偲ばせます。かつて山頂に要害、麓に本丸（御殿と天守）があり、そして二の丸が本丸を囲んでいました。二の丸には毛利氏ゆかりの寺社があり、東北部に宮崎八幡宮や満願寺（祈願寺）等、西部に洞春寺（元就の菩提寺）や妙玖寺（元就室の菩提寺）がありました。宝暦年間（一七五一～六四）には、稲荷社と仰徳神社が洞春寺の東側に建立され、また寛政三年（一七九一）三田尻御茶屋の秋葉社が、二の丸の東園にあった天神社の東隣に遷座されました（『萩市史』ほか）。

現在、御殿跡の北側にある志都岐山神社は、明治十一年（一八七八）山口の豊栄神社（祭神元就）・野田神社（祭神敬親）の遙拝所として地元の有志が創建し、翌年に指月神社と改称、その後、今の社号に改めたものです。祭神は元就から元徳までの毛利氏歴代。境内には曲折を経て遷座した仰徳神社があります（同前）。しかし右に記した毛利氏関連の寺社は、移転や統廃合などにより跡地が残るだけです。明治維新による体制の劇的な変化は、藩主家の庇護のもとにあった寺社にも大きな影響がありました。

少し下調べをして、現地の案内板を参考に散策すれば、当時の人々の息遣いが感じられるかもしれません。

（担当　河本・宮﨑・小田）

志都岐山神社

萩城跡

明治維新部会

幕末維新期の「おもてなし」

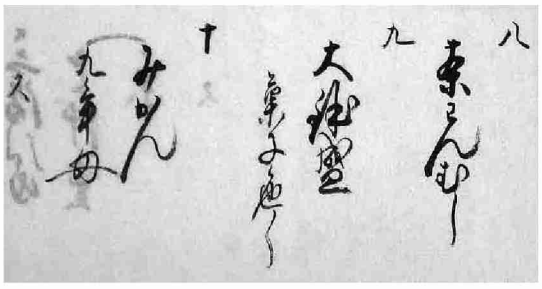
ペリー来航以来、我が国では外国人を食事で接待する機会がぐんと増えました。それでは、もてなしの食卓にはどんな料理が並んでいたのでしょうか。今回は、その一例を紹介しましょう。

慶応二年（一八六六）十二月二十九日、防府三田尻で長州藩主父子がイギリスのキング提督を饗応しました。幕長間の緊張が高まる中、この会見はイギリスとの心理的距離を縮める「好機会」と位置づけられていました。実は、このときのメニューが記録に残されています。

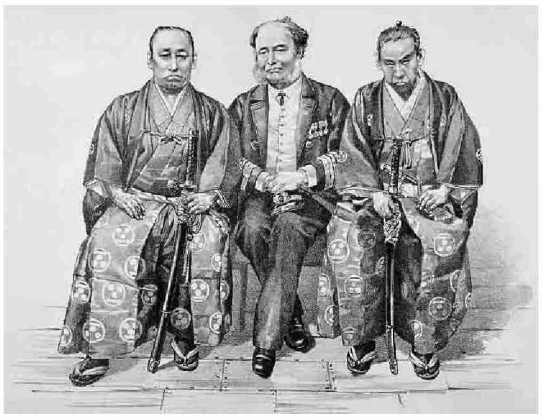
それによると、お吸物に始まって前菜は湯引鯛、焼鳥。中盤は細工かまぼこや富士はんぺん、蓮根、鮎などを詰めた「大重箱」。締めは茶碗蒸しで、デザートは「菓子色々」に続いてみかんと九年母が並べて出されました。おそらく、一流の調理人による最高級の料理であったことでしょう。

明暦元年（一六五五）、下関での朝鮮通信使の接待に豚料理があったことと比較してみると、かなり和食寄りのメニューですね。生ものは控えつつも、誇りをもって日本の食文化でもてなす姿勢が伝わります。あるいは、列強に迎合することなく対等に向かい合うという、長州藩の主体的開国の精神も表しているのかもしれません。

（担当　北林・古屋・渡部）



「御献建」の一部（「英国人三田尻渡来一件」毛利家文庫9諸省601、山口県文書館蔵）



毛利敬親・元徳父子とキング提督
（毛利家文庫81写真141、山口県文書館蔵）

現代部会

戦後史料の宝箱 ― 広報誌 ―

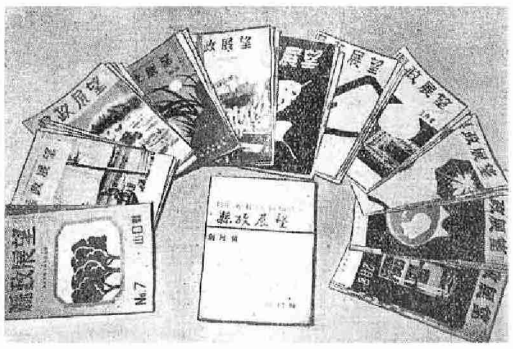
山口県が発行する『ふれあい山口』という広報誌をご存じでしょうか。そのルーツをたどると、昭和二十三年（一九四八）に創刊された『県政展望』に遡ります。

時代は占領期、戦後初めて選挙で選ばれた田中龍夫知事の時代で、創刊に寄せられた言葉によると、その目的は、「県庁内各部課及び県下各行政機関の連絡と、県政の実体を広く県民に知らせる」ことなどとされました。記事の多くは、当時の部長や課長などの職員が寄稿し、様々なテーマが取り上げられています。県民向けにわかりやすく整理された記事は、当時の時代背景や社会状況を探る貴重な手掛かりであり、既刊の史料編『現代4』・『現代5』にも、数多く収録しています。

『県政展望』は、県財政が逼迫する中、記念すべき五〇号を迎えた昭和二十八年三月、田中知事の引退と重なるように、突如廃刊となってしまいます。以降、同年十一月からは『県政のしおり』が、タブロイド判で三十六年までを引き継ぎ、翌三十七年には、再び雑誌の形に戻った『県政やまぐち』が登場します。その後、『県政の動き』を経て、『グラフ山口』、そして、現在の『ふれあい山口』へと、受け継がれていきます。

（担当　津枝・瀬崎・中野）

田中龍夫知事（1910－1998）
昭和22年4月、戦後初の民選知事となった。（写真は山口県文書館蔵）



最終号で紹介された『県政展望』バックナンバー
『県政展望』50号（昭和28年3月）より
（山口県立山口図書館蔵）

県史編さん室の所蔵写真より

山口県史の編さんが平成四年度からはじまり、今年度で二六年目となりました。これまで四一巻中三七巻を刊行し、残り四巻となっています。県史編さん事業も大詰めの段階ですが、これまでに残っている当室所蔵の写真二枚でこの事業の一端をみてみたいと思います。

右下の写真は、事業の開始に当たり、当時の平井龍知事が揮毫した「県史編さん室」の看板を、県庁北庁舎入り口に設置したときのものです。現在でも同じ場所に掲示してあります。力強い文字がはっきりと残っていますが、一方で色の変化が一段と進んでおり、この事業の年月の長さとともにその重みを感じさせられます。

左下の写真は、平成八年度にシンフォニア岩国で開催した第五回山口県史講演会の様子です。このときは、会場の多目的ホールが満席となったため、施設内の別室にモニターを用意し、入りきれなくなった方々をそちらに案内するほどの盛況ぶりでした。講師は、近世部会長の脇田修大阪大学名誉教授で、現在、県史編さん委員会の副会長（会長は県知事）を兼ねていただいています。（担当　大村・河村）

第５回山口県史講演会の様子

看板を手にする平井龍知事

県史アラカルト 13

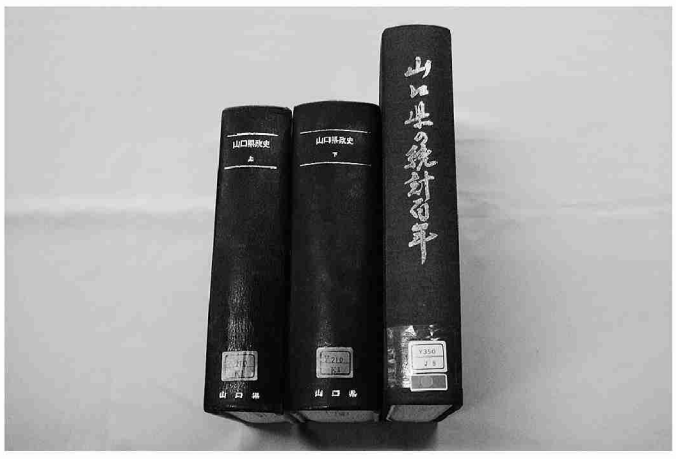
「維新百年」を振り返る

平成三十年（二〇一八）は、明治一五〇年の節目の年となります。この記念すべき年を前に、県内では、様々な記念行事やイベントが企画され、「維新胎動の地」として、明治一五〇年を迎える気運が高まっています。では、五〇年前の〝明治百年（維新百年）〟は、どのように迎えられたのでしょうか。

明治改元から数えて百年目となる昭和四十三年（一九六八）十月二十三日、日本政府主催の明治百年記念式典が、日本武道館で開催されました。この日は、県内各地でも多くの記念行事があり、学校や官公庁も午後は休みにして、県民総出で〝明治百年〟を祝っています。〝維新の故郷〟萩市では、明治百年を記念して萩市民館が建設され、十月六日には、完工式と同時に記念式典が行われました。また、二十三日には、吉田松陰の誕生地に完成した〝吉田松陰と金子重輔の二人像〟の除幕式も行われています。

また、〝維新公園〟の名称でおなじみの「維新百年記念公園」が、国が指定する全国一〇か所の明治百年記念公園の一つとして整備されることになり、昭和四十八年に開園しています。

開園式の維新百年記念公園（昭和48年11月22日）
（写真は山口県文書館蔵）
ゲートでは警察官が警備している。



山口県文書館編『山口県政史』上・下巻（1971）と、山口県総務部統計課編『山口県の統計百年』（1968）
（山口県立山口図書館蔵）
いずれも維新百年を記念して編さんされた。

編さん事業では、山口県総務部統計課『山口県の統計百年』（一九六八）、山口県文書館『山口県政史』（一九七一）などの、『山口県史』の先輩に当たる労作が、この記念事業の一環として、実を結んでいます。

このような事業のなかで、注目すべき役割を果たしたのは、県立山口博物館です。まだ県立美術館ができる前の昭和四十一年、老朽化が進む博物館を改築し、美術館機能を併設する県文化センターとして再生する計画が持ち上がりました。改築中は、県内各地で「維新への歩み」巡回展を開催し、四十二年（明治百年の前年）秋に工事が完了すると、十月一日から十一月五日の日程で、「維新百年記念全国展―近代国家への歩み―」を開催しています。〝全国展〟という名称は、「お国自慢ではなく、全国的な視野に立つ」という意味で、全国各地で展示されたわけではありません。山口博物館には、期間中に一八万人の来場者が押し寄せ、大成功を収めています。

新聞では、『朝日新聞』が、特集「維新展の見どころ」を一五回で組む一方、『防長新聞』は、特集「わが町わが村の明治維新」を計八四回で、一月から九月の長期にわたって掲載しています。当時は、さながら〝明治維新〟一色の様相を見せていたようです。

明治一五〇年は、どんな年となるのか、今から楽しみです。（津枝）

改築した県立山口博物館（上）と維新百年記念全国展の開会式（下）（昭和42年10月）
（写真はいずれも山口県文書館蔵）
山口博物館改築のこけら落としとして開催された「近代国家への歩み」展は、〝維新百年〟の目玉となった。

ふるさと山口・32

本物の汽車旅を味わう

西日本旅客鉄道株式会社
代表取締役社長　来島　達夫

海岸線や山あいなど、鉄道に乗って、移り行く車窓を楽しみながらの鉄道の旅。ものを考えるにしても、鉄道の旅に限るということも言われる。旅情を掻き立てたり、いろいろな用途のお役にたてる鉄道も、もともとは、明治維新後の日本において、殖産興業政策を推し進める中で、電信・郵便などと並んで、近代化のためのインフラ整備の一環として強力に進められた。

日本の鉄道開業は、明治五年（一八七二）、新橋・横浜（現、桜木町駅）間においてであり、明治天皇は新橋駅からご乗車され、鉄道がわが国の繁栄に寄与することを念願されたとされる。ここ山口県では、明治三十年（一八九七）に山陽鉄道により、広島・徳山間で初めて鉄道が走り、今年で一二〇年を迎える。その後の明治三十四年（一九〇一）に下関（当時は馬関）まで開通し、関門間を除く現在の山陽本線が全通する。また、山陰本線は、長州鉄道により、大正三年（一九一四）に幡生・小串間が開通、京都から全線が繋がったのは昭和八年（一九三三）で、今年で八四年を数える。

明治後期明治三十九年（一九〇六）の鉄道国有化、戦後昭和二十四年（一九四九）の日本国有鉄道という公社化を経て、多くの特急・急行・寝台列車が活躍してきたが、新幹線開業、航空網や高速道路の整備、モータリゼーションの流れにより、鉄道の役割も大きく変容を余儀なくされた。世の中のニーズ、社会から求められるものが変わった以上、私たちも変わらねばならないと思う。

今も、地域の交通網として、また、拠点都市間の輸送機関として鉄道がお役にたてるところは、他の交通モードと競争裡にあっても、更に努力を重ねていかなくてはならないと思う。

今年六月から、「トワイライトエクスプレス瑞風」の運行を開始した。長い準備期間を経て、ようやくお客様をお迎えすることができた。山口県をはじめ、山陰・山陽沿線の皆様のお力添えのもと、沿線の自然、歴史、文化、伝統、食材など多くの魅力を全て取り揃えて、特別な列車の旅をお楽しみいただいている。いわゆる「長州五傑」の一人で、鉄道の父と呼ばれる幕末の志士・井上勝侯を輩出した山口県内を「瑞風」が颯爽と駆け抜ける情景は、鉄道を営む者として、格別の想いがある。とりわけ、沿線や到着するホームにおいて、地元の皆様の心温まるお出迎えにより、お客様お一人おひとりに忘れ得ぬ感動をお届けできることは、この上ない喜びである。鉄道でなくてはできない、こうしたおもてなしと自然の香りや葉加瀬氏の楽曲など五感で感じていただける旅をお一人でも多くのお客様に堪能していただけるよう、県民の皆様と一緒になって、大切に育んでまいりたい。

地域に根ざす・33

平生町郷土史研究会

本会は現在一九名の会員で活動している。

主な活動は、会誌の発行、町外や町内の史跡の現地探訪、町内の史跡や偉人についての調査研究をまとめたものの作成等である。

会誌は、会員が調査研究した成果を発表する場とするのが理想であるが、今はその道に秀でた人に書いてもらうなどしている。昨年は、平生出身の自由律俳人である久保白船のことを研究している会員に書いていただいた。

昨年の町外史跡探訪は、萩市の世界遺産めぐりをした。松下村塾、萩反射炉、恵美須ヶ鼻造船所跡などを見学したが、特に古地図を片手の萩城下町めぐりでは、ボランティアガイドの案内でとても有意義な散策ができた。

町内史跡探訪は、行く機会の少ない佐合島を選んだ。久保白船の生家跡や白船の描いた絵が見られる佐合八幡宮等を訪ねた。昔、放浪の俳人種田山頭火が、親友の久保白船を訪ねて佐合島に度々きたことを思うと感慨深いものがあった。

本会は、郷土の史跡や偉人の調査研究の成果をまとめたものを作成している。「一門六家大野毛利氏と平生開作」「明治維新の志士白井小介」「ふるさとの自由律俳人久保白船」「ふるさと平生町の石造文化」「ふるさと平生町の民話と伝説」「般若姫物語」等である。

最近では「平生町地名の由来」、昭和十六年頃と昭和四十年頃の「懐かしい平生町の町並み図」を作成している。

今後も、会員一丸となって息の長い活動をしていきたい。　（会長　立畠　浩）

古地図を片手の萩城下町めぐり

連絡先　熊毛郡平生町大字平生町一九三―四
平生町立平生図書館内
〇八二〇―五六―二三一〇
平生町郷土史研究会

県史刊行のお知らせ

今後の配本予定巻についてお知らせします。

『通史編　近世』 織豊期における戦国大名毛利氏の動向や萩藩政を中心に、概ね天保頃までの本県の歴史を叙述する予定です。

『通史編　幕末維新』 一九世紀の対外的危機発生の時期から、明治初期における中央集権国家形成までの長州藩の幕末維新史を叙述する予定です。

『通史編　現代』 昭和二十年（一九四五）の終戦後から、二一世紀を迎え、今日につながる時期も視野に入れながら本県の歴史を叙述する予定です。

『別編　年表』 『資料編』、『史料編』、『通史編』の成果にもとづき、「考古年表」「歴史年表」としてまとめる予定です。

どうぞご期待ください。

こちら県史編さん室

十一月十八日、山口市の山口県教育会館を会場に、第二六回山口県史講演会を開催しました。

講師は、山口県史編さん専門委員の荒川章二先生（国立歴史民俗博物館教授）で、「近現代山口県の人的ネットワーク―県外県人団体を中心として―」と題して講演されました。

本県と中央との結びつきに大きな役割を果たしてきた在京県人団体について考察した内容は、大変興味深く、参加者からもご好評をいただきました。

講演中の荒川章二先生

山口県史の構成・刊行計画（全41巻）

【通史編】　6巻
- 原始・古代
- 中　世
- 近　世
- 幕末維新
- 近　代
- 現　代

【民俗編】　1巻
- 民　俗

【史料・資料編】　33巻
- 考古１（原始）
- 考古２（古代以降）
- 古代（古代史料）
- 中世１（記録）
- 中世２（県内文書１）
- 中世３（県内文書２）
- 中世４（県内文書３・県外文書・文学資料）
- 近世１（政治１）
- 近世２（政治２）
- 近世３（経済１）
- 近世４（経済２）
- 近世５（文化）
- 近世６（諸家文書１）
- 近世７（諸家文書２）
- 幕末維新１（政治・社会１）
- 幕末維新２（政治・社会２）
- 幕末維新３（政治・社会３）
- 幕末維新４（政治・社会４）
- 幕末維新５（経済）
- 幕末維新６（軍事）
- 幕末維新７（文化・海外史料）
- 近代１（政治・社会・文化１）
- 近代２（政治・社会・文化２）
- 近代３（政治・社会・文化３）
- 近代４（産業・経済１）
- 近代５（産業・経済２）
- 現代１（県民の証言　体験手記編）
- 現代２（県民の証言　聞き取り編）
- 現代３（言論・文化　プランゲ文庫）
- 現代４（産業・経済）
- 現代５（政治・社会）
- 民俗１（民俗誌再考）
- 民俗２（暮らしと環境）

【別　編】　1巻
- 年　表

※ **太字**は既刊

山口県史だより　第34号

平成29年11月25日発行

編集・発行／山口県県史編さん室

〒753-8501　山口市滝町１番１号

TEL　083-933-4810

FAX　083-933-4869